

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：外国語第Ⅱ部会

部長名：吉田典子

作成者名：吉田典子

概要（2000字）

1. 組織・運営—現状と問題点—

平成22年度3月末現在で、外国語第Ⅱ部会の構成員は32名であった。その内訳は、次の各教科と教員からなる。

独語 国際コミュニケーションセンター：2名、国際文化学研究科：8名、人文学研究科：2名、国際コミュニケーションセンター特任教員（外国人教員）：1名

仏語 国際コミュニケーションセンター：1名、国際文化学研究科：7名、人文学研究科：2名、国際コミュニケーションセンター特任教員（外国人教員）：1名

中国語 国際コミュニケーションセンター：2名、国際文化学研究科：3名、国際文化学研究科特任教員（外国人教員）1名

露語 国際文化学研究科：2名

各言語別に組織されていた教科集団を廃止し、すべての第Ⅱ外国語を外国語第Ⅱ部会に統合する新制度を平成17年度に発足させてから5年が経過した。新制度においては各言語間にかかわる横断的事項を各言語部（独語部、仏語部、中国語部、露語部）の代表者（幹事）が会合を持って協議し、部会全体に諮り、ここで最終決定をするという仕組みを設けて実施してきた。このことによって、たとえば年度ごとに変動する新入学生の選択言語希望数に伴う開講クラス数の増減にも、ある程度まで柔軟に対応することが可能になった。新制度の導入以前においては、開講クラス数の増減が非常勤講師の採用数にもかかわることから、ともすれば年度ごとに教科集団の都合が優先され、必ずしも十分な協議がなされず、そのために合理的な解決を見出すことも困難であった。だが、新制度の下では比較的長期的な展望にもとづいて問題点を協議できるようになり、各言語部間の相互理解を深め、今後に向けた諸課題を共有できるようになった。しかし、非常勤講師の雇用に関しては十分な配慮が必要であり、必ずしも開講クラス数の変化にすぐさま対応できるわけではないので、十分な話し合いと長期的な展望が望まれる。

その一方で外国語第Ⅱ部会を構成する各言語部は個別的課題、たとえば教務関係、教科研究などの事項を旧教科集団から引継ぎ、協議・検討を行っている。また各言語部にあつては恒常的に非常勤講師と接触し、全教員から教科にかかわる意見を聞くとともに、定期・不定期の非常勤講師と専任教員の会合を持って教務的な事項の確認を行い、教科ごとに教授法などについて議論し、課題の整理を行っている。また各言語部にかかわる横断的な問題については部会での協議にゆだね解決を図っている。以上のように非常勤講師への授業依存率が比較的に高い第Ⅱ外国語の場合には、非常勤講師から意見を聞き、教育改善に反映させることの意義は大きい。今年度（平成22年度）からは、新しい年度の開始に当たって、専任・非常勤両方の外国語担当教員に向けての外国語ガイダンスが実施され、神戸大学全体の外国語教育に対する考え方や教務事項の伝達がなされたことは、高く評価できる。これにより、非常勤講師の方々にも、神戸大学の外国語教育をになう一員としての意識を明確にさせていただくことができたと思われる。また全体ガイダンスの後には、各語学別に話し合いの場を設定することにより、教科に関するより具体的な事項について協議することができた。

今後の課題として、各言語部あるいは第Ⅱ外国語という狭い枠組みや視座にとらわれることなく、神戸大学全体の教育という観点に立ってより一層活発な議論を交わす場と

して、外国語第Ⅱ部会を活用していくことが求められている。

2. カリキュラム—現状と問題点—

1年次：ⅠA（前期）、ⅠB（前期）／ⅡA（後期）、ⅡB（後期）（以上、全学部必修）、SA+SB（後期、希望者より選抜）

2年次：ⅢA（前期、文・経済・経営のみ必修、他学部は選択）／ⅢB（後期、選択）

3年次：ⅣA（前期、選択）／ⅣB（後期、選択）

ⅠA・ⅡAでは基礎的な文法事項の教授、ⅠB・ⅡBでは実践的な言語運用能力の習得を主眼とした授業を行っており、これらは全学部必修科目である。なお17年度から、1年次後学期にインテンシブコース（SA/SB）のクラスが設置された。このクラスは、日本人教員とネイティブ・スピーカーとが半コマずつ担当し、1コマとして、週に2コマ（SA/SB）、希望する学生用に開講されるものである。このクラスを受講し、取得した単位はⅡA、ⅡBの単位に読み替えられる。

2年次におけるⅢA（文・経済・経営のみ必修）・ⅢBは選択科目であり、1年次に習得した語学力をさらに発展させたいと希望する学生のために開講される科目である。

なお、17年度から外国語Ⅲとして2年次にイタリア語、韓国語、スペイン語、ドイツ語、フランス語が週に一度開講されるに至った。このクラスは選択科目であり、1年次にⅠA・ⅡA／ⅠB・ⅡBの単位を取得した学生のみが受講可能である。このクラスの性格上、たとえば独語及び仏語のクラスについては、すでに1年次に独語の単位を取得した学生は独語を、また仏語の単位を修得した学生は仏語を受講することはできない。なぜなら、このクラスは三つ目の外国語を学習しようとする学生のためのクラスだからである。

また平成20年度から1、2年次以降も引き続き第Ⅱ外国語を学び、より高度な言語運用能力の修得や当該外国語圏への留学などを希望する学生のために、3・4年次向けⅣA（前期）／ⅣB（後期）を設置した。これにより、学習意欲の高い学生がさらに外国語力を磨く環境が整備された。

現在のクラスサイズは40名を越えないことが原則とされているが、語学学習にあつては、理想的には30名以下が望ましい。可能であればこの点についての更なる改善をお願いしたい。本年度（平成22年度）の場合、神戸大学の入学者合計は2,650名であり、30名クラスを実現しようと思えば、外国語第Ⅱの開講クラス数は、再履修者を考慮せず単純に計算して約88クラス必要である。それに対して、現行の開講クラス数は、4言語を合計して81クラスにすぎない。可能であれば、開講クラス数の増設をお願いしたい。また、年度によって、各言語の選択者数は変動するが、今年度においては中国語の選択者数が多く、再履修者を合わせると50人を超えるクラスが工学部、海事科学部等で生じた。例年、その年度の選択履修者数が判明するのが4月5日～6日であるが、人数の多いクラスが出た場合、急遽クラスの増設（非常勤講師の手配）ができるようにしていただけるとありがたい。

3. 活動の状況（授業実施にあたっての工夫や問題点）

平成16年度から各年度の初頭に新入生を対象とする外国語オリエンテーションを実施してきた。今年度（平成22年度）からは、各クラスで初回の授業を担当する教員が、このオリエンテーションを実施することとなった。このオリエンテーションを通じて教育の目的、外国語学習の意義、学習方法などを説明し、本学における外国語学習システムについての理解を図り、学習意欲の向上を図るよう努めている。

すでに「1. 組織・運営—現状と問題点—」で述べたように、各言語部での討論、また非常勤講師との定期・不定期の会合などを通じて、教科担当教員から広く意見を集め、問題点の把握に努めてきた。学生からの授業アンケートと、教員の現場からの意見に基づき、授業のいっそうの改善に向けて努力している。たとえば授業中にどのような点が理解困難であるか、どのような話に学生は関心を示したかなどの情報提供により、学生

の理解力あるいは興味のあるようについて知ることができ、授業の改善工夫、教科書の作成・選定などの際、大いに役立っている。

独語、仏語、中国語では国際コミュニケーションセンターが中心となって、毎年オーストリア、フランス、中国の大学での夏季集中講習に参加させている。たとえば、独語では本学と全学学術交流協定を締結しているグラーツ大学での夏季集中ドイツ語講座に参加し、さらに翌年から交換学生として同大学に留学する学生も見受けられ、そのほか学部間協定に基づく交換大学への留学生も多い。このことから、これらの海外研修は学生の学習意欲を向上させるのに大いに役立っていると判断される。今後、単位化が検討されることを希望する。

目下、共通教科書の導入等による、教育の水準の共通化についても議論しているところである。また共通教科書を採用しない場合には、必修基礎語彙およびその語数について各言語の教員間で議論し、決定し、かつそれを各言語の教育の共通の枠組みとする方向での議論も進んでいる。しかしながら教育の共通化は、すなわち教育の画一化につながりかねないと懸念する声も聞かれる。

4. 課題と問題点

外国語の教育は単に語学の習得のみを目指すものではなく、同時に異なる国の文化、ものの見方に接し、自国の文化、自分のものの見方を相対化し、すぐれた教養を身につけた、国際的に通用する社会人の育成をも目指すものである。したがって、教授者には語学力と共に各教授者の専門に応じた深い学識が要求され、常日頃の研究にもたゆまぬ努力が不可欠である。他方で、持ちコマ数、及び大学運営のための事務的任務が増大する傾向にあって、研究に十分な時間を割けない状況にある。この問題は、非常勤講師の採用問題、大学運営の簡素化など様々な問題と連動していて、一朝一夕には解決しがたい。しかし、上記の各分野での改善が実現されれば、教員の負担軽減にもつながる。その結果として、担当クラスの学生に対して一層きめ細かな指導を行い、また教授法に関する意見交換の場をいっそう拡大することも可能になる。

様式2 (続き)

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況)平成18年度からのカリキュラムの改定により、4年間一貫の語学教育が目指されることになった。外国語教育の国際化のために、たとえばEU(欧州連合)の言語水準などの国際的基準の導入も試行されている。さらに外国語学習意欲の高い学生のためにインテンシブコース(SA/SB)、アドバンストコース(IVA/IVB)、第三外国語のクラスを提供してきた。また母語以外に二つの言語を習得させることを通じて、多言語の習得を実現すると共に、多文化理解を促進する上でも貢献してきた。本年度はこの新カリキュラム実施から5年が経過している。以下の報告書の細目で説明する通り、新カリキュラムの試みは改善の余地はあるものの、おおむね好結果を得ていると言える。

根拠資料

- ・ 学則
- ・ シラバス
- ・ 外国語教育ハンドブック 2010年度版

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況) 各言語の教員の集団(独語部、仏語部、中国語部、露語部)あるいは非常勤懇談会などで教授法、教科書の作成と選定の適否、学生の興味のあるようなどについて恒常的に議論し、検討している。たとえば本学の授業用として作成あるいは採用している教科書には比較文化的な内容をふんだんに取り込んでいるものも多い。

根拠資料

- ・ 各教員の自己点検・報告書
- ・ シラバス
- ・ 教科書

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況) 期末テスト以外に、毎授業の終了時あるいは学期間に数度、小テストなどを実施し、理解不十分なところを学習者に明らかにし、復習を促し、また毎授業後に宿題を課したりすることによって復習と予習とを奨励している。また、毎回の授業後に授業・学習記録カード等を用いることによって教員と学生との意思疎通を図っているクラスもある。これは授業と授業外での自習とを有機的な関連をもって進める上で大きな効果を発揮している。

根拠資料

- ・ 出席簿(小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入)
- ・ 期末授業アンケート
- ・ 各教員の自己点検・報告書
- ・ 教科書

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。(例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。)

(観点に係る状況) IA(IIA)とIB(II B)との授業の連携を図っている。たとえば文法中心の授業と会話中心の授業とを設けるなど、効果的な語学の教授のあり方を探っている。グループ方式による授業や教壇上に立っての会話発表などの、緊張感を持って学ばせる工夫もなされている。またIII A、III Bでは、多様なテーマを設定した授業を行うなど、学生の関心を喚起することに力を入れている。教員が一方向的に授業を行うのではなく、語学の授業にゼミ形式を取り入れることによって、ディスカッションし、発表する力をつけることをめざす授業形態も試行している。さらに週に決められた時間帯に国際コミュニケーションセンター所属の各言語の専任教員がランゲージ・ハブ室(以下ハブ室と略記)に詰め、各言語についての質問に応じている。またハブ室にはTA(独、仏、中からの本学大学院への留学生)が決められた時間帯に待機し、いつでも各言語による対話の実践が可能になっている。このほかCALL教室を整備・開放し、外国語教育ソフトを充実させて、学生を自学自習へ導くための課題を学生に課すクラスもある。

根拠資料

- ・ 外国語教育ハンドブック 2010年度版
- ・ シラバス
- ・ 授業中の配布資料(文化面にかかわる)

- ・ ハブ室勤務表

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

（観点に係る状況）小テストを行い、その解説を授業中に行っている。また、次回の授業時に小テストを返却し、誤りやすい箇所、理解不十分なところを改めて説明し、基礎学力不足の学生を生みださないように努力している。毎回の授業後の提出カード等を用いて、重要ポイントが理解できているかをチェックし、個別の質問に答えている教員も少なくない。各言語とも高い合格率を示し、また期末試験における受験放棄者は極めて少ない。

ハブ室には国際コミュニケーションセンター所属の各外国語の専任教員が一定時間帯に待機し、学習の仕方などについていつでも相談に応じる体制にある。小テストの励行によって学生の学力を常にチェックすることにも配慮している。また CALL 教室の活用を促し、自習を効果的なものにするよう工夫している。上記はすべて各言語部における議論に基づき、全体の合意のもとで実施されてきた措置である。

根拠資料

- ・ 出席簿（小テストの成績、宿題の提出の有無をも記入）
- ・ 期末授業アンケート
- ・ ハブ室訪問学生簿
- ・ 成績分布表

5-3-②： 成績評価基準に従って、成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

（観点に係る状況）期末試験、小テスト、宿題の提出、出席・予習・発表状況等を適度な割合で総合評価して成績評価の基準とし、シラバスに明示し、あるいは最初の授業で学生に説明している。

根拠資料

- ・ シラバス
- ・ 出席簿
- ・ 期末試験答案
- ・ 各教員の自己点検・報告書

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

（観点に係る状況）学期末の学生アンケート（「授業評価」）で各言語ともほぼ全項目にわたってよい評価を受けている。語彙や文法について、あるいは文化について興味を抱き、授業後に個人的に質問に来る学生も増えてきた。また海外における夏季集中研修への参加を希望する学生や大学の交換留学制度を利用して留学する学生、個人で外国旅行に行く学生も増えている。

根拠資料

- ・ 学期末の学生アンケート（「授業評価」）
- ・ 海外夏季集中研修参加名簿
- ・ 成績分布表
- ・ 各教員の自己点検・報告書

基準 7 学生支援等

7-1-②： 学習相談、助言（例えば、オフィスアワーの設定、電子メールの活用、担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

（観点に係る状況）国際コミュニケーションセンター所属教員が一定時間帯にハブ室に待機し、学習相談に応じている。あるいは国際コミュニケーションセンターのホームページ上に各言語別に質問コーナーを常設し、電子メールでの相談にもに応じている。また各教員が担当クラスの学生に相談・助言の時間帯を伝え、必ずしもオフィシャルではないものの、オフィスアワーを私的に設け、質問、相談等に応じている。

根拠資料

- ・ 国際コミュニケーションセンターホームページ
- ・ 国際コミュニケーションセンター勤務表
- ・ シラバス
- ・ 各教員の自己点検・報告書